

総合的コミュニケーション力の伸長を目指す異文化交流授業の手法

川口 康子・池谷 千恵

Yasuko KAWAGUCHI, Chie IKETANI: An Approach for Developing Comprehensive Communication Ability in Cultural Exchange Class

国際交流・文化交流に関連する授業は小学校・中学校・高等学校・大学のあらゆる教育段階において、さまざまな形態で行われている。しかしその目標や手法等については、検討の余地があるのが実情である。本稿では、授業「異文化交流」の教育目標を「総合的コミュニケーション力の伸長」と定め、効果的な授業内容と手法を検討した。また授業の評価を学生及び授業担当者の振り返りから行い、その成果と今後の課題を提示した。

キーワード：総合的コミュニケーション力 文化的知識 主体性 表現力 対話力

はじめに

本学国際文化交流学科の授業「異文化交流」は、1年次後期に開講されている必修科目である。平成8〔1996〕年に、当時の英語英文学科の授業科目「異文化コミュニケーション」として新設された。国際化の進展にともない、国際相互理解を促進するとともに、英語によるコミュニケーション能力、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図ることを目的として授業を行った。本授業の目標および実践内容については、川口・杉本（2000）で検討したとおりである。

国際文化交流学科（平成13〔2001〕年、改組により設立）において、この授業は「異文化交流」と名称を変更したが、教育目標およびティームティーチングの形態は踏襲した。しかしながら、ここ数年の急速な国際化の進展に伴い、多文化の共生が日常的なものとなってきた今日の状況において、必要とされることは日常生活における双方向のコミュニケーション力である。そうした時代の変化に対応して授

業内容を検討した結果、当初学習項目としていた異文化理解、カルチャーショックあるいはコミュニケーションギャップ等にかわって、異文化交流を通して総合的なコミュニケーション力の育成を図ることを目的として授業改善を行ってきた。また国際文化交流学科の入学生は、日本文化の学習を主な目的とする学生もあり、必ずしも全員が英語力の伸長を目指しているわけではないこと、あるいは基礎的な英語力を伴わない学生もいることから、授業内で異文化圏出身の参加者と英語を用いてコミュニケーションを行うことが難しくなっている。

授業担当者は、こうした学生の実情や社会の現状を踏まえ、最大の教育効果をあげるために授業目標やねらいをどのように設定すべきか、どのような授業方法・内容を取るべきか、毎年検討を重ね、授業の改善を図ってきた。

文化交流という学びの分野は学際的色彩が濃く、教育理論、教育方法等がいまだにしっかりと確立されているとは言えないのが実情であろう。そこで本稿においては、あらためて「異文化交流」の授業目標は何かを問い、どのように実践し、どのように達

成度を評価すべきか、検討を行うこととする。

1. 授業「異文化交流」の目指すもの

(1) 授業の目標と内容

「異文化交流」の授業概要とねらいは、次のように設定し、シラバスに示している。

〈授業の概要〉

外国の人々と実際に接することにより、異文化の存在を認識するとともに、異なった文化や価値観を受け入れる姿勢を養い、また積極的に自分のことや自分の文化を相手に伝えるための知識と技能を習得し、文化背景が異なる人とのコミュニケーションには何が必要か考察する。

〈授業のねらい〉

異文化理解を促進する上で必要な知識と技能の育成を図るため、相手の国や文化等を自ら調べ検証するとともに、自分の国や文化に関する知識を深めて相手に伝えようとする姿勢を養う。また異文化圏の人とともに、学生間でも積極的に双方向のコミュニケーションを図ろうとする態度を育成する。

上記の内容を踏まえ、授業内容はおよそ次のように行ってきた。

- 1) 日本文化に関心をもち、知識を深める。各自が特に関心をもつ分野については、詳細に調べ、相手に分かりやすく伝える。
- 2) 異文化圏出身の参加者の国や文化について関心をもち、調べ、交流授業時に検証する。
- 3) 15回の授業のうち、7回目に1コマ、最終回に4コマの交流授業を実施する。

1回目の交流授業は、主として日本の暮らしに焦点を当て、異文化圏参加者へ日本の日常的習慣等を伝える。最終回の交流授業は、県下の外国語指導助手（以下、ALT）および国際交流員（以下、CIR）の研修¹⁾を「異文化交流」授業で受け入れる。午前中は学生による日本文化紹介と体験学習、午後は様々な国の文化をクイズ形式で学び、また各国のダ

ンスなどの活動を通して交流を図る。

学生による授業評価アンケートでは、毎年高い評価を得ているが、自由記述欄に記載された意見では、リサーチやプレゼンテーションに苦手意識があるため、交流授業の準備に興味をもてなかったり、ストレスになったりしているケースが見られた。ただし最終回の交流における満足度が高く、授業評価においては総合的な満足度を上げている。しかしながら学生のコミュニケーション力伸長の度合いを評価すると、必ずしも十分な成果をあげているとは言い難い。このことは授業方法の弱点と考えられ、この課題の解決策を検討する必要が認められた。

平成19年度までの授業実施における主な反省点として、次のことがあげられる。

- 1) グループ活動が多いため、リサーチ課題などをこなさない学生や依存心の強い学生の場合、個々の学習成果を十分にあげることができない。
- 2) ステップアップを図るうえで、振り返りは大切な要素であるが、記録をあまりとらない学生の場合、学びの成果が不十分である。
- 3) 交流という楽しさにより充実感を味わうことができるため、課題を見つける、調べを深める、対話を継続する、等の本来の授業目標の認識があいまいになる。
- 4) 文化交流が、一方的な文化紹介あるいは相手に質問をしてその回答を得ることによって文化理解を図ることにとどまり、文化を通してさまざまな視点でコミュニケーションを促進する姿勢を育成することが十分に行えていない。
- 5) 達成度を評価するうえで重要となる個々の学生のプロセスを見ることが十分に行えない。

そこで平成20年度の授業では、これらの反省点を踏まえ、「交流力を高める」をキーワードとして学生に明示し、「総合的コミュニケーション力」の伸長を目指した。そのための過程と到達目標を次のように項目別に詳しく提示し、徹底を試みた。

○「交流力を高める」

- 1) 自分の文化に関心を持ち、知識を深める。
 - ①いろいろな視点で自ら自分の文化に関して質問をする。
 - ②文献等だけではなく自分自身の日常的実践のなかで、知識を豊かにし、自信をもつ。修得した情報を身近な人と交換する。
 - ③様々な文化的知識のなかから自分の得意分野をつくり、自信を高める。
- 2) 相手に伝える。
 - ①楽しく、分かりやすく伝え、プレゼンテーション力を育成する。
 - ②コミュニケーション手段を豊かに用いる。
例：言語（日本語、英語、ほか）、絵、ジェスチャー、表情、寸劇（スキット）、写真、映像、実物、音楽、コンピュータ、CD・MDプレーヤー
 - ③実際の自分の生活を背景に文化を伝える。
- 3) 相手や相手の文化に関心をもち、知ろうとする。
 - ①自分の文化背景を基盤にして、質問をする。
 - ②自分の文化との相似・相違点に気づく。
- 4) 相手の文化について調べたことを検証する。
 - ①知的好奇心をもつ。
 - ②双方向のコミュニケーションを図る。
- 5) 積極的な態度の育成に努める。
 - ①フレンドリーであること。
 - ②ポジティブであること。

○到達目標

- 1) 自ら課題を見つけて調べ、さらに一層知識を深めようとする。
- 2) 習得した手法を用いて、柔軟な姿勢で双方向のコミュニケーション活動を作り出すことができる。

また今年度は初めての試みとして、受講者38名全員にノートを配布し、授業内容を記録することはもとより、事前の調べや異文化圏参加者との交流時に検証したこと、振り返りやまとめ等、授業に関連す

るあらゆることをこの1冊にまとめるよう指示した。これは、上述の反省点を踏まえての試みである。

(2) 平成20年度の授業内容

平成20年度の授業の特徴と留意点、各回の主な授業内容、最終回の文化交流の内容は次のとおりである。

1) 特徴および留意点

- ①学生自身が日本文化に関する知識を深めるため、主体的にリサーチを行う。

日本文化に関する知識の修得は、それをすべて異文化圏参加者へ提供するという目的ではなく、豊富な知識は交流時のより良いコミュニケーションの基礎となることを理解し、まず自分自身の知識を豊かにすることを目的として行う。調べ方は、文献の知識をそのまま活用せず、必ず自分自身の生活に合致する内容であるかどうかを確認し、また周りの人に尋ねるなどして検証を行う。

- ②相手の文化に興味関心をもち、事前に調べた上で交流時に検証する。その際、尋ねるだけでなく、自分の文化の事例も話題にする。

- ③リサーチテーマを見つけて調べるということに対して、負担感をもつ学生がいるため、「日本文化に関する100の質問」、「異文化圏参加者の国について聞いてみたい10のQ&A」などとタイトルをつけることにより、取り組みへの負担感を軽減する。

- ④課題を積極的に行う学生と行わない学生など、授業態度に差異がある場合を想定して、それぞれの作業が滞りなく進められるよう、時間調整が行える作業時間を設ける。

- ⑤本時の授業内容や今後の日程を示し、学生が主体的に関わることが可能な状況を設定する。

- ⑥随時振り返りの時間を取り、確認しながら展開する。

- ⑦授業中に重要な内容をノートに取る際、黒板に記載したものを写すだけでなく、話を聞き取り

ながら自らノートを取るにより、まとめる力をつける。

- ⑧ノートの記録を繰り返し見るにより、自らステップアップを図るよう自覚を促す。
- ⑨リハーサルを数回試みるにより、文化紹介の創意工夫を行い、自信をもって相手に伝えられよう心がける。
- ⑩グループを作成する際は、個々の学生の資質等を考慮し、お互いが協力し合って作業を進めることができるよう、メンバー構成に配慮する。

2) 主な授業内容

第1回 1) 授業概要、ねらいの説明 2) 日程説明 3) 宿題：日本文化に関する質問を考える

第2回 1) グループ分け 2) アイスブレイキング 3) 考えてきた質問をグループ内で出しあう(仲間と話し合って答えを考える、自分が考えてきた答えを言う) 4) グループ内で文化理解が深まる良い問題を1題選び、クラス全体に出題する 5) 宿題：自分が考えた質問、グループ内で出た質問について調べる(①まわりの人に聞くなどして検証する ②文献等で調べる) 6) 講義：「調べる」とは

第3回 1) 今後3回の授業内容説明 2) 次週ノート提出、ノート記入の確認 3) グループ内で順番に1人1つずつ良い問題を出題し、回答が出た後、調べてきたこと、検証してきたことを解説する(1人2～3分) 4) 講義：クイズの効果(コミュニケーションのバリエーション、出題の仕方・解説の仕方) 5) プレゼンテーションの準備(次週1グループ3分、わかりやすく・楽しく、グループ全員で協力) 6) 教員による出題と解説の例示 7) 宿題：プレゼンテーションの改良

第4回 1) グループ毎でプレゼンテーションの準備&リハーサル 2) 日本文化クイズ2問 3) 振り返り 4) 外国人参加者への質問と想定される回答の調査

第5回 1) 今後の予定説明 2) 前時のプレゼン

テーションの振り返りと改善のための話し合い

3) 外国人参加者の国「タイ」についてグループ毎に出題と解説、その後全体で共有 4) 講義：異文化コミュニケーションの姿勢

第6回 1) 次週の文化交流の概要説明 2) タイの人へのQ&A(グループで15分、全体で15分) 3) 日本文化紹介の打ち合わせ 4) リハーサル(全グループ一斉に3分タイマーで時間設定) 5) 改善のためのディスカッション 6) 2回目の通しリハーサル 7) 振り返りとまとめ

第7回 1) タイ研修生²⁾16名受入 2) あいさつと授業内容説明 3) 日本文化紹介 4) 意見交換(両国相互理解、学生は準備している質問をする) 5) レポートの指示(どのような働きかけをしたか、プレゼンテーションの振り返り、次の交流に生かすこと)

学生による日本文化紹介 ①住居：日本の床はすべて畳でできているか? ②成人：日本で大人になるのは何歳? ③箸：正しい割りばしの割り方は?

④おせち：健康を願って食べるものはなに? ⑤恵方巻き：恵方巻きを食べるときやっちはいけないことは? ⑥千羽鶴：千羽鶴はどういうときに人にあげるか? ⑦言語：カタカナのもとになった漢字は? ⑧神社：神社でのおまじりの仕方は?

第8回 1) タイ国青年との交流の振り返り 2) プレゼンテーション再演(観ている学生は他のグループの良いところと改善点を書く) 3)



写真1 タイ研修生との交流

ALT・CIRとの交流授業の説明 4) 日本文化体験の内容を検討し精選 5) 教員によるデモンストレーション(最近の文化, 伝統文化) 6) 宿題: 各自紹介できる文化体験内容を書く

第9回 1) 日本文化紹介の内容検討 2) グループ分け 3) 企画書に記入

グループ名	発表内容	発表時間
1000	お茶の道	10:00-10:15
2000	書道	10:15-10:30
3000	琴	10:30-10:45
4000	将棋	10:45-11:00
5000	歌	11:00-11:15
6000	礼儀作法	11:15-11:30

写真2 日本文化紹介の企画書

第10回 1) 各自調べてきたことを報告しディスカッション 2) 各グループ準備開始 3) 企画書の返却と面談 4) 各グループの発表 5) 宿題(さらに調査, 準備と練習, 企画案の完成)

第11回 1) 今後の予定説明 2) 企画案進捗状況の確認 3) 企画案の発表と意見交換 4) コメントをふまえて企画案の練り直し 5) 文化リサーチ(調べてきた内容をクイズ仕立てにする, その間に課題のチェック(やっていない学生は, 調べたい内容を質問仕立てで考える) 6) クイズ出題, 解説(各グループから1名) 7) 宿題: 文化リサーチ: ALT&CIRの人たちの国・文化についてリサーチ)

第12回 1) 文化リサーチ 宿題チェック(担当する日本文化, 参加者出身国の文化リサーチ) 2) 文化リサーチ 3分間プレゼン準備(準備できていない学生は「発表予定内容」を書きだす) 3) 文化リサーチの3分間プレゼンテーション(各グループ一斉に行う, 発表者は起立, 他の学生は「再話」ができるようメモを取る, 発表内容のポイン

ト, 良い点, 改善点は何か。) 4) 再話(数人を個人あて) 5) 文化体験プログラムの検討 6) 文化紹介のリハーサル 7) 宿題: 文化紹介を完成させる, 実演部分の準備, 練習)

第13回 1) 今後の日程説明 2) 英文資料の作成: 日本語をデータで提出 3) おさらい 4) 通しリハーサル

第14回 1) リハーサル 2) レポートの指示



写真3 日本文化紹介のリハーサルの様子

第15回 1) 日本文化紹介(華道, 茶道, 書道, 琴, 伝統的な遊び, 歌, 将棋, よさこい, 礼儀作法, 若者ことば・方言) 2) マオリのダンス 3) ワールドクイズ

日程10:00-10:15 あいさつ, 趣旨説明

10:25-11:25 日本文化体験①

11:40-12:40 日本文化体験②

12:40-13:30 昼食

13:30-14:00 パフォーマンス(よさこい, 歌, 方言を披露)

14:10-15:00 ワールドクイズ/ダンス

15:10-16:00 ダンス/ワールドクイズ

16:00-16:10 あいさつ

出身国:アメリカ(37名), イギリス(2名), オーストラリア(2名), カナダ(5名), 台湾(2名), 中国(6名), アイルランド(1名), トリニダード・トバゴ(1名), ニュージーランド(4名), フランス(1名), 南アフリカ(1名), モンゴル(1名),

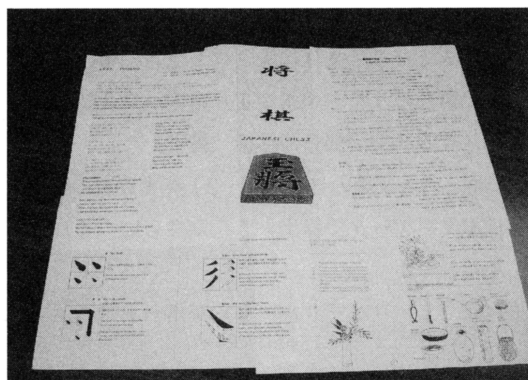


写真4 異文化圏参加者への配布資料

韓国(11名)(ドイツとロシア各1名欠席)

日本文化体験①, ②は同じ内容を学生が担当する。外国人参加者は①と②で, 2種類の内容を体験する。午後は学生を含め全参加者を2グループに分け, 1グループがダンスを行う間, 別のグループはワールドクイズの回答を出しあいながら交流を促進する。ワールドクイズはCIRが編集を担当し, ダンスはニュージーランド出身のALTが担当した。

今年度の授業は, 十分な知識を備え, またノートによる確認や数度のリハーサルを行うことによって, 担当する文化項目についての自信を持ち, より柔軟で積極的なコミュニケーションを行う力を身に付けることを目標とした。

一グループの人数は4~5名とし, それぞれが必ず何らかの役割を持って協働することを心がけるよう促した。

交流時には, 文化的知識をもとに, 対話を促進させ, 検証することを課題としたが, クイズとダンスの間に十分な対話の時間を取ることができなかったことは, 反省すべきことである。

3. 異文化コミュニケーション教育および中央教育審議会答申の視点から交流授業を考える

本授業が学生に培わせたいとする力を「総合的コミュニケーション力」と述べたが, 「総合的コミュ

ニケーション力」とはどういったものであるのか, 異文化コミュニケーション教育における「異文化コミュニケーション能力」, 中央審議会答申に述べられている「生きる力」をとりあげ, 考察する。

(1) 異文化コミュニケーション教育の視点から

異文化コミュニケーション研究が行われはじめた1950年代, 「異文化コミュニケーション能力」の必要性が言われたのは海外企業で働く人たちに対してであった³⁾。有能な社員が, 海外赴任においてカルチャーショックやホームシックなどの異文化への不適合を起こすといったことから, 彼らには「文化的な熟練度」が求められ, それを教育, トレーニングすることが必要とされたのである。

その後, グローバル化, 国境を超えた人の移動, 文化交流, 観光の活発化, メディアの発達, といった趨勢の中で, この能力は日本社会においても日常的に求められる資質となってきているといえよう。

日本国内における異文化コミュニケーション研究も, 1990年代頃より盛んになり, 大学・短大の語学系, コミュニケーション系学部・学科などにおいて「異文化コミュニケーション」関連科目が設置されるようになった。

異文化コミュニケーション教育とは, 一言でいうならば「異文化コミュニケーション能力」を身につけさせるための教育である。では「異文化コミュニケーション能力」とは何か, あるいは「異文化コミュニケーション」の素養・能力を備えた人とはどのような特徴を持つのか。

ルーベン(Ruben, 1976)は, 良質な異文化コミュニケーションに貢献することができるのは,

- 1) 相手へ尊敬と敬意を積極的に示すこと
- 2) 非評価的・非決断的な態度で返答すること
- 3) 相手のニーズに基づいたコミュニケーションを心がけること

といったコミュニケーション態度であるとした⁴⁾。「相手への敬意, 柔軟性, 順応性」などの態度・性質とも言い換えられよう。

これらの態度は、本授業で学生に求めるコミュニケーション態度と一致するものである。

またピーツバーグとクーパは、コミュニケーション能力の評価を試み、「自覚的コミュニケーション能力」と呼ぶ3つの次元を提示している⁵⁾。

- 1) 動機づけ (motivation):異文化の人々とのコミュニケーションを望む気持ち、コミュニケーションの送り手の主体性
- 2) 知識(knowledge):効率的にコミュニケーションしようとする方法の自覚と有効な情報を多く収集し、知的に理解すること
- 3) 技能 (skills) :効率的にコミュニケーションするために必要な行動に従事する能力

この3つの視点は、平成20年度の本授業の授業プログラム作成、また学生の成果の点検において、意識した視点といえる。

相手への積極的なコミュニケーション態度と、豊かな文化的知識の獲得、コミュニケーションスキルの獲得、といった異文化コミュニケーション能力の要素は、「総合的コミュニケーション力」に相通じる部分が大きいいえよう。また、「自覚的コミュニケーション能力」の3つの次元は、本授業の教育効果の指標として参考にした。

(2) 中央教育審議会答申の視点から

中央教育審議会答申（以下 答申）および学習指導要領の理念は、交流授業のあり方を検討するうえでも、留意すべき重要な内容を数多く含んでいる。そこで、交流授業の改善を念頭において、答申を読み取ることとする。

現行学習指導要領は、平成8（1996）年の答申（「21世紀を展望した我が国の教育の在り方について」）で示された「生きる力」⁶⁾の理念に立脚している。「生きる力」の内容としてあげられているのは、次の3点である。

- 1) 自分で課題をみつけ、自ら学び、自ら考え、主体的に行動し、よりよく問題を解決する資質や能力

- 2) 自らを律しつつ、他人とともに協調し、他人を思いやる心や感動する心など、豊かな人間性

- 3) たくましく生きるための健康や体力

平成20（2008）年1月に発表された答申（「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について」）では、この「生きる力」が引き続き掲げられた。この答申においては、学習指導要領で示された「生きる力」という理念が十分に浸透しなかったことを取り上げ、その理由について、学習指導要領の理念を実現するための具体的な手立てが十分ではなかったこと、生きる力がなぜ必要か、生きる力とは何かということについての周知・徹底が十分でなかったため⁷⁾、と指摘された。そして「生きる力」という理念を共有することの重要性が示された。

また平成17（2005）年の答申（「我が国の高等教育の将来像」）で指摘された内容が、あらためて確認された。この答申では、21世紀が新しい知識・情報・技術が政治・経済・文化をはじめ社会のあらゆる領域での活動の基盤として飛躍的に重要性を増す「知識基盤社会」(knowledge-based society)の時代である⁸⁾、として、その特質が4点示された。

- 1) 知識には国境がなく、グローバル化が一層進む
- 2) 知識は日進月歩であり、競争と技術革新が絶え間なく生まれる
- 3) 知識の進展は旧来のパラダイムの転換を伴うことが多く、幅広い知識と柔軟な思考力に基づく判断が一層重要となる
- 4) 性別や年齢を問わず参画することが促進される

さらに、流動的で複雑化した先行き不透明な時代を迎える中、相互の信頼と共生を支える基盤として、他者の歴史・文化・宗教・風俗習慣等を理解・尊重し、他者と積極的にコミュニケーションをとることのできる力がより重要となってくる⁹⁾、と指摘し、高等教育の中核として大学の果たすべき役割が述べ

られた。

なお、平成20年の答申においては、「生きる力」という認識は、経済協力開発機構（OECD）の研究による主要能力（キーコンピテンシー）の考え方と共通し、修得した知識を活用して主要能力（キーコンピテンシー）である思考力・判断力・表現力を身に付けさせることが生きる力となる、と述べている。

このように答申に見る「生きる力」、グローバル化の進展に伴う柔軟な姿勢や他者理解の必要性、思考力・判断力・表現力などのキーコンピテンシーの育成など、多くの観点で交流授業が目指す資質の育成と共通していることが分かる。これらの内容は、今後の授業改善に向けての指針としたい。

3. 交流授業の目指すべき目標と手法

(1) 平成20年度「異文化交流」学生の振り返りの分析から

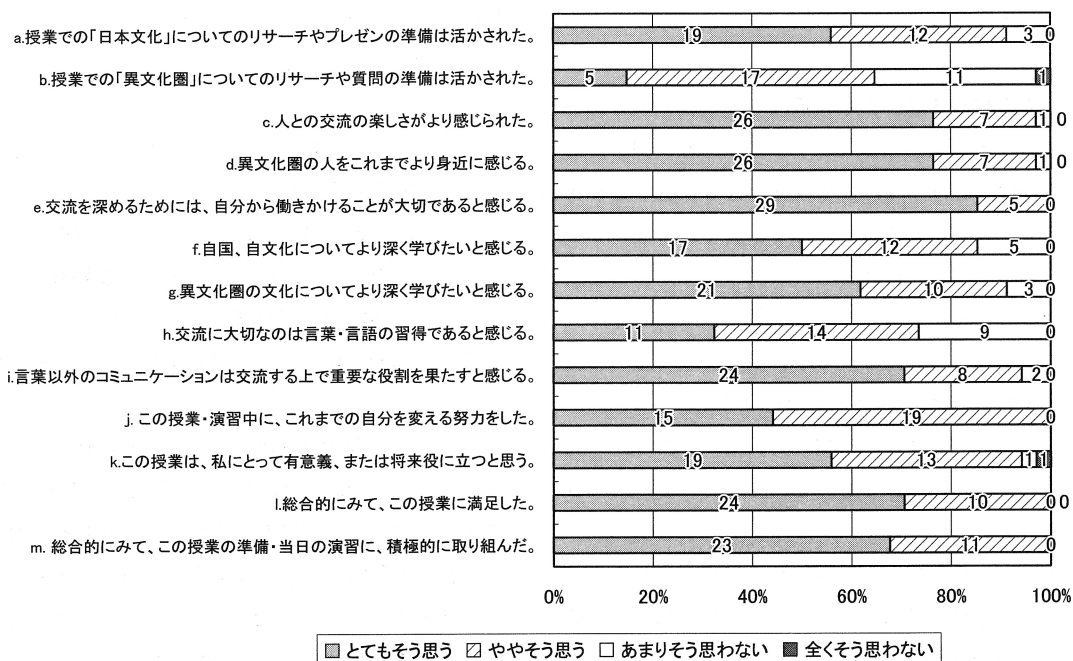
授業「異文化交流」終了後、13項目の質問及び自由記述のアンケートを実施した（38名中34名回収）。

各質問項目についての回答は表1の通りである。

異文化交流への積極的・肯定的な姿勢（c. d.）、交流のための主体性の重要性（e.）、を学生は強く感じている。つまり、自覚的コミュニケーションで言うところの「動機付け」はこの授業においてある程度成功していると言えるであろう。

自文化、異文化についての知識の重要性、また知識を得たいという意欲も多くの子が感じている（f. g.）。ただし、異文化圏の人との交流当日までに修得した文化的知識に関して、日本文化については交流の場面で活かされたと考えている学生が多いが（a.）、諸外国の文化についての学びは必ずしもそうではない（b.）。これは今年度の交流の際に、日本文化紹介についてはまとまった時間を取って行えたが、一方異文化圏の人との歓談・交流の時間が充分にとれなかったため、検証ができなかったことに要因の一つがあると考えられる。自覚的コミュニケーションの「知識」の部分については、前年度までよりも意識的に学ばせることができたが、今後もさらにその効果的な手法を検討する必要がある。

表1 平成20年度授業「異文化交流」に関するアンケート



があろう。

コミュニケーションの「技法」に関する学生の振り返りについては、言語コミュニケーションの重要性よりも非言語コミュニケーションの重要性を実感した学生が多い (h. i.)。また、「ジェスチャーや言葉などが必要になるのはもちろんだが、交流に対して自分が積極的に取り組むことが最も必要だと感じた」といった「技能」の獲得に加えて「交流への積極的態度」について記述している学生が多かった。言語運用能力、非言語コミュニケーション力(表情、ホスピタリティ、他者への適切なふるまい)、積極的コミュニケーション態度、これらが本学科でめざしている「総合的コミュニケーション力」であるとすれば、この授業は積極的コミュニケーションのあり方を体感する機会となっているといえる。かつ、外国語の運用能力を高めたいと考える学生にとっては、さらなる学びの意欲をもつ良い契機になっている。

アンケートの最後には自由記述欄を設け、「この授業・演習を通して(異文化圏)の人との交流について今あなたが考えることを自由に記述してください。」とした。多く見られた記述は「交流への積極的態度の重要性」「異文化理解の楽しさ」「自文化(日本文化)理解の重要性」「非言語コミュニケーションの重要性」等に関する気づきであった。またこの授業における異文化交流体験については、肯定的に捉えている記述がほとんどであった。

また「異文化圏の人との交流を通して自分の世界が広がった。国境がなくなって一つになった気がした。」「今回の交流を通して感じたのはいろいろな人がいるということだった。人と人との交流では相手に何か共感する部分を感じて、はじめていろいろな人がいるということが意識できるのではないかと考えた。」といったような、自己成長や多文化共生への気づきなどに関する記述があった。「自覚的コミュニケーション力」を高め、本授業がめざすところの「総合的コミュニケーション力」を伸ばすためには、自己の成長を実感することが重要であろう。

また、文化対文化といった異文化理解にとどまらず、多文化への興味、他者との共生の姿勢が求められるよう。これらの記述から、本授業の専門教育科目としての位置付けが読み取れ、「交流力」の伸長を目指す授業の今後の検討課題と可能性を感じる。

(2) 授業担当者による振り返り

交流授業の難しさは、「生きる力」を理解する難しさとの共通点があるように思われる。その難しさとは、授業の目標やねらいを設定することはできるが、その目標を達成するための効果的な手法を編み出すことが難しい、ということである。また到達目標をどのように設定し、どのように評価するか、ということも大きな課題であった。この授業の手法について毎年検討を重ねる間、時代は多文化共生へと変わり、それに伴って授業で身に付けるべき知識と技法も変更する必要が生じてきた。そうして今年度の手法を試みることとなったが、学生のアンケート結果によれば、目標をおおむね達成できたと言うことが出来るのではなかろうか。ただ、学生アンケートに現れていない反省点がいくつかあり、授業担当者による振り返りをここに掲げることとする。

1) ノートの活用による知識修得への効果

ノートの活用により、学びの進展を具体的に見えるものとして表示することは、意識の向上につながり、動機付けが具体的に知識の修得を促進させた。

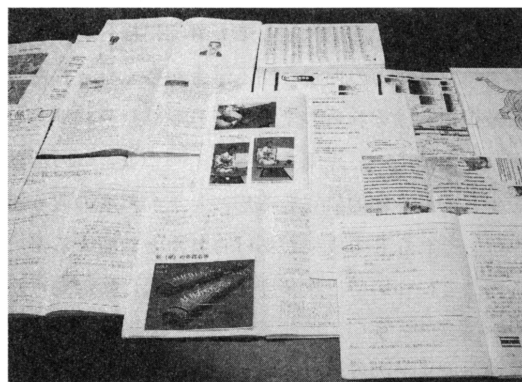


写真5 学生の記録・リサーチノート

2) 知識修得の目的

知識を豊かにすることの目的は、自分自身を成長させるためである。交流授業は、情報そのものを相手に伝えることが主たる目的ではなく、情報を伝えようとしている自分自身を相手に理解してもらうことが目的である、ということを学生は自覚する必要がある。コミュニケーションを行う上で重要なことは、文化を切り口として、自分の言葉で自分自身のこと、自分の生活、自分の国のことを相手に伝えるとともに、それに対する相手からの言葉を理解し、それに対して再び自分の言葉で相手に返すことである。そのための基盤が、豊かな知識である。このことを学生にしっかり認識させることが、成果をあげる要因の一つであろう。

この過程を理解し、十分な知識を備えた学生の交流当日のコミュニケーションは、とても円滑に行われ、参加者側の評価も高かった。一方この過程の理解がまだ不十分な学生も見られるため、自分自身の文化への関心を持たせる手法をさらに検討する必要がある。次年度への課題としたい。

今年度の授業では、到達目標を

- 1) 自ら課題を見つけて調べ、さらに一層知識を深めようとする。
- 2) 習得した手法を用いて、柔軟な姿勢で双方向のコミュニケーション活動を作り出すことができる。

と設定した。

前年度までと比較し今年度は、ノート、振り返り、リハーサル等の活動を通して、着実に総合的コミュニケーション力の伸張を図る学生が多くみられた。授業担当者はそれらの全過程での取り組み状況とレポート等によって評価を行った。一つひとつの活動を少しでも具体的に見える形にした今年度の取り組みは、それなりの成果があげられたと判断するが、このことについては次年度以降もさらに検討を重ねたい。

前年度までの反省点として、この授業で培った力がその後の授業やその他の活動に必ずしも生かされ

ない、ということがあった。今年度に関して言えば、3月に異文化圏へ出かけ、現地で研修授業を受けた数名の学生の姿勢に昨年までとの違いがあった。学生たちは、滞在中、文化的知識を活かし異文化に対して柔軟な姿勢で臨み、相手との交流を深めたり、主体的にコミュニケーションを図ろうとする態度が見られた。また、研修中自らノートを持ち、いろいろ書きとめるなど、今年度の「異文化交流」の授業成果と思われることが多くあった。

授業の成果は、学生たちのその後の実践によっても検証できると言えよう。

おわりに

「異文化交流」の授業担当者として、毎年、学生の資質などを配慮したうえで授業目標を設定し、それに応じた授業・演習内容の検討を行ってきた。12年間（国際文化交流学科として8年間）、チームティーチングで取り組んできたこの授業は、時代に応じ、また担当者の授業・教材研究などを踏まえ、多少なりとも進化してきているといっていよいであろう。しかし、この授業の本当の目標にはまだ行きついていない感否めない。次の著作が述べていることは、この授業の今後の課題を検討するうえで、後押しになる。

「国際交流というと、まず外国の人々に対し日本をいかにして紹介し、あわせて世界のさまざまな文化をいかにして日本人に紹介するかに焦点がおかれがちということだ。たしかにそれは必要であり、意味のある作業ではあろう。しかしよく考えてみると、ここにあるのは「交流」ではない。別々の方向をもった二つの「直流」にすぎないのではないか。（中略）いまほんとうに求められているのは、国際的な対話である。（中略）交流は、対話を通じてはじめて実現する¹⁰⁾。」

これは「異文化コミュニケーション-新パラダイムへの展望」というセミナーで、河合隼雄氏との対談を終えたあとに、石井米雄氏が述べていることで



写真6 異文化圏参加者とともに

ある。「(国際)対話」、「国際対話能力」と言うと、具体的な到達目標が見えてくるように思われる。国際理解、文化紹介、といった域に留まらず、相手の背景を理解し、自己表現をしてコミュニケーションを深め、相手との関係を築いていく「対話能力」の養成が、今後の本授業の目指すところと言えよう。

文化的知識の修得は、短期間で行えるものではない。このため、単一の授業内で豊富な知識を修得することは時間的に難しく、複数の授業科目が有機的に連携することが大切である。国際文化交流学科において、総合的コミュニケーション力の育成は、言語、文化、交流・心理の3つの分野の学びの総合力と位置付けている。個々の授業の改善を図るとともに、専門教育科目の体系化・系統化は本学科の今後の課題である。

《注》

- 1) 平成13(2001)年より、鳥取県交流推進課が主催する「JETプログラム等中間研修」を本授業で受け入れている。開始当初は、本学側で日本文化体験プログラムを作成したが、その後実施方法・内容等について鳥取県と協議を行いワールドクイズ等が加えられた。ALT、CIRにとっての日本文化研修の機会であるとともに、学生の交流力を培う学びの場となり、双方に資するところが大きい。
- 2) 1回目の交流では、これまで県内在住の大学研究員、留学生、およびその家族など様々な異文化

圏出身者を招いている。今年度は国際協力機構(JICA)を通して本学科での研修受入の依頼があったタイ青年を迎えた。タイ研修生の日本における研修目的は国際理解、ボランティア活動である。

- 3) Pribyl, Charles B『科学としての異文化コミュニケーション』ナカニシヤ出版、2006年、p. 136
- 4) Ruben, B.D. “Assessing Communication Competence for intercultural Adoption” Group and Organizational Studies, 1, 1976年、pp. 334-354
- 5) Pribyl, Charles B, 前掲書、p. 138
- 6) 中央教育審議会(第一次答申)「21世紀を展望した我が国の教育の在り方について」(3)今後における教育の在り方の基本的な方向において初めて使用された。
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/12/chuuou/toushin/960701.htm
- 7) 中央教育審議会(答申)「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について」1. 現行学習指導要領の理念 2008年1月17日
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1216828_1424.html
実際、筆者は「総合的な学習の時間」が導入された当時、学校現場で「生きる力とは何か? 取り組み方がよく分からない。」という先生のことをよく聞いた。
- 8) 中央教育審議会(答申)「我が国の高等教育の将来像」第1章 新時代の高等教育と社会 1. 今後の社会における高等教育の役割の冒頭で述べられている。2005年1月28日
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/05013101.htm
- 9) 前掲 第1章 新時代の高等教育と社会
- 10) 河合隼雄、石井米雄『日本人とグローバリゼーション』講談社、2002年、pp. 197-198 (2001年9月に行われた神田外語大学異文化コミュニケーション研究所主催セミナーの内容がまとめられて

いる)

Organizational Studies, 1, 1976年

引用文献

- 1) Pribyl, Charles B『科学としての異文化コミュニケーション』ナカニシヤ出版, 2006年
- 2) Ruben, B.D. "Assessing Communication Competence for intercultural Adoption" Group and

参考文献

- 1) 川口康子・杉本千恵 授業「異文化コミュニケーション」の目標 —平成11年度「異文化コミュニケーション」の授業実践を踏まえて— 鳥取女子短期大学研究紀要, 41, 2000年, pp. 41-49